

メッセージ

被災地からのメッセージ

全国の皆さまへ

福島医療生協

理事 阿部ツギ子さん

福島医療生協の理事・阿部ツギ子さんに被災地の生協として
できることや、全国の生協に伝えたいことなどをお聞きしました。



インタビューにご協力いただいた福島医療生協の阿部ツギ子理事。

● 正確な測定が 「安心」を生む

福島医療生協では、生協の「つながろうCO・OPアクション」から「しんげん募金」(以下、くらし応援募金)を活用して食品の放射線測定器を購入、予約制で組合員の食品の検査を無料で行なっています。

また、同じく「くらし応援募金」によって、設置型WBC(立式ホルボディーカウンター^{※1})を購入、2月から稼働しています。

渡辺幸夫専務理事から、「本体が5トンとかなり重いので、まずは床の補強を行ないました。また、外の大気中の放射線に反応してしま

いますので、周囲を鉛製の壁で覆うなど工事に2、3カ月かかりました」との説明をいただきました。

阿部ツギ子理事は、「全国の皆さまのご協力に感謝します。放射線を正しく測定して理解すること、組合員が交流して情報を共有することで、放射能に負けない心を作ることができます。正確な測定器の導入は心強い限りです」と話していました。

福島医療生協・わたり病院の放射線技師・院内接遇インストラクターの會田伶史さんによれば、このWBCは2分ほどで測定でき、すぐに結果を知ることでもできるそうです。「放射能検査は継続して計測することが重要ですから、2年に



福島医療生協に設置されたWBC。

1回は定期的な検査をしてくださいと声を掛けています。時間はかかりませんが、多くの方に受けていただきたいと思いますね」

● 発災直後から続く ボランティア

2011年3月11日、福島市は、死を覚悟するほどの強く長い揺れに襲われ、断水と停電も経験しました。「揺れが収まり、停電もすぐに回復しましたが、それからが大変でした。まだ寒い時期で、避難所となつた近くの高校の体育館はすぐに人がいっぱいになりました。食事やトイレ、寝る場所などすべてに不自由しました。福島医療生協では、発災1週間後から避難所の

炊き出しを始め、温かいものを食べられるようにしました。福島県農民連の皆さんが新鮮な野菜を届けてくださったのも、ありがたかったですね。医療生協の職員や組合員もみんなが被災していましたが、『何かやりたかったから』とすぐに集まってくれて、『やっぱり医療生協の仲間だな』と思いました」

高校の授業が始まるため、炊き出しは約1カ月後の4月5日に終了しましたが、福島医療生協では現在も仮設住宅での見守りやボランティア活動を続けています。

「月に1回の健康チェックボランティアでは、血圧測定などのほか、簡単な体操なども行なっています。震災から3年余りを経て、仮設住宅に暮らす方の孤独死、子どもたちの不登校の増加などは深刻になっていきます。仮設は長く住むところではありませんし、狭くて思い切り泣くこともケンカすることもできません。震災の前は皆さんが広いお庭のある大きなおうちに住んでいましたから、余計に悲しいと思います。一人暮らしの男

性など『いつ死んでもいい』とおっしゃる方も多いです。心配ですが、引き続き向き合ってまいります」

●生協と福島の良さを再認識

震災の翌日、多くの福島市民が給水車の給水を待つて寒空の下で何時間も列を作って待ちました。お子さんを連れられた方もたくさんいました。この時、普段の何百倍もの放射性物質が大气に広がっていたのです。このことを一部のメディアが



多くの励ましのメッセージ。

報じたのは、ずっと後のことでした。

「原発事故について行政は何も伝えず、市民の皆さんはその水を使っていました。でも、放射能をただ怖がるのではストレスがたまるだけです。生協では、放射能に関する勉強会を定期的に関き、「福島の子ども保養プロジェクト」(コヨット!※2)とも積極的に連携しています。『交流会でいろいろなお話を聞いてほっとした』『自分だけが追い込まれている気がしていたが、楽になった』などの感想も聞かれます」と阿部理事。

渡辺専務も、「勉強会ではいろいろな方にお話を聞いており、参考になります。中でも『福島再生——その希望と可能性』(かもがわ出版)の著者の一人である齋藤紀先生のお話はとても勉強になりました」と正しい知識を持つことの重要性を指摘されています。

問題はまだ山積みですが、阿部理事は、「震災によって、福島はとて素晴らしい所なのだ」と再認識しました」とも話されています。

「これからもたくさんの方に福島

に来ていただいで、野菜や果物、魚などおいしいものを食べてほしいですね。山も海も変わらず美しく、除染を続けることで少しずつ放射線の値も下がってききました。これからも、ご支援をお願い申し上げます」

最後に、渡辺専務は、「生協、民医連や農民連、ユニセフなど多くの皆さんが福島を見守ってくださっていることは心強いです。測定器やWBCは生協のご支援がなければ買えませんでした。生協の『連帯』の力をあらためて学ばせていただいた気がします。『自分たちは、福島は、独りではないのだ』と確信しました。感謝しています」と話していました。

(取材日2014年1月9日)

※1 体内に摂取された放射性物質の量を体外から測定する装置。

※2 週末保養企画を中心に、子どもの被ばく積算量を心配する保護者の気持ちに寄り添った、子どもと保護者がほっとできる時間づくりを目的としている。